谷 凡美 詩集

つくば野

日本定形詩人会刊

谷　凡美著作目録

谷　凡美民謡集	(昭和42年12月刊)
民謡集・**土　時　計**	(昭和45年12月刊)
民謡集・**第二土時計**	(昭和48年12月刊)
詩謡集・**こぼれ麦**	(昭和51年12月刊)
詩謡集・**百　夜　笛**	(昭和54年12月刊)
詩謡集・**土　鳴　り**	(昭和57年２月刊)
詩謡集・**青　い　畝**	(昭和58年９月刊)
詩謡集・**裏つくば**	(昭和59年７月刊)

谷　凡美抄

茨城県真壁郡協和町小栗3497に生まれる。本名　大谷盛雄。

いばらぎ新聞「木星欄」に発表した作品を時雨詩社主宰羽田松雄氏に認められ，引き続いて「定形詩人」主宰松本帆平師に育てられて現在に至る。所属 ── 日本定形詩人会，日本詩人連盟，日本歌謡芸術協会，郷土の「紙風船」等。

谷　凡美　詩謡集　**つくば野**

発　行　昭和61年２月１日　¥2,500

著　者　谷　凡　美

〒309－11茨城県真壁郡協和町小栗3497

電　話　0296－57－3602

発行所　**日本定形詩人会**

〒177東京都練馬区関町北３－20－26

電　話　03－928－9683

印刷所　コロニー印刷

電　話　0423－94－1111

谷　凡美 詩謡集

つくば野

日本定形詩人会刊

題字・松本帆平

序

筑波嶺の新桑蚕の衣はあれど
君がみ衣もあやに着ほしも

この歌は万葉集東歌の部にある常陸国雑歌の一首である。その筑波嶺を朝夕眺めているお百姓詩人がいる。

茨城県協和町在住の谷凡美君である。彼は掘抜井戸から噴き出す清水のように詩謡を噴き出して、これまでに『土時計』『こぼれ麦』『青い畝』『裏つくば』等十指におよぶ詩謡集を世に問うて噴々の好評を博している。

今回さらに新輯の『つくば野』を加えることになった。

土性骨の据った哀歓と諧謔は、伝統の歌垣に新鮮なる薫風を送るものと信じて疑はない。

昭和六十年師走

月原　橙一郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次・つくば野

〈百姓くらし〉

青葉酒……8
稲作り……9
燕……10
田螺……11
水鶏……12
想いが稔る……13
野良たばこ……14
青葉風呂……15
麦こがし……16
梅雨がくづれて……17
かみなり……18
燕……19
なすび……20
ローンに追われて……21
米の飯……22
手打そば……23
稾干し……24
混ぜ作り……25
西瓜当って……26
百姓爺……27
三下り……28
長い刑……29
筑波米どこ……30
野焼き……31
叺織り……32
鴉……33

〈花によせて〉

ほおずき笛……36
鳳仙花……37
木守柿……38
栗……39

想え草……40
からす瓜……41
茶花一枝……42
彼岸花……43
紫陽花……44
花柘榴……45
つりしのぶ……46
茨……47
公孫樹並木……48
青葉みち……49
菖蒲湯……50
白膠木の實……51
たらの芽……52
花木犀……53
大文字草……54
茶揉み……55
ほてい草……56
そら豆……57

〈天地有情〉

炭入れ瓢箪……60
老庭師……61
手作りワイン……62
紬とり……63
燈籠舟……64
糸切り歯……65
裏通り……66
そば處……67
糸納豆……68
湯タンポ……69
冬至……70
都々逸通り……71
千人針……72
蝸牛……73
人力車……74
蒟蒻……75

八丈暮し……76
蟬が鳴く……77
鳰……78
鮎……79
納豆賣り……80
馬追い虫……81
糸とんぼ……82
枇杷の葉……83
蟷螂……84

〈いろは箱〉

いろは箱……86
矢立て旅……87
秋を拾いに……88
戸袋とんぼ……89
達磨……90
網……91
枕……92
石導……93
石地蔵……94
卯の花……95
里訛り……96
お遍路……97
曲り家……98
老麗などとは……99
たばこ盆……100
梅酒……101
秋は詩の季……102
青垣……103
江差うた……104
惚を背にして……105
翁草……106

あとがき

百姓ぐらし

青葉酒

里は　南風（もよかぜ）
目に青葉
　ふと　胸よぎる　芭蕉の句

詩（うた）　胸床に
掻きあげりや
　水に浮いてる　昼の月

濡れつばくらめ
キチ　キチと
　田植の萱笠（かさ）を　掠めてく

目刺しを編んだ
藁といて
　今宵ア田植の　青葉酒。

（六〇・五・一作）

稲作り

稲は根作り
作土は五寸
それを目安すに　深耕(うな)い

堆肥たんと遺りや
育ちは素直
筑波風味を　粒に出す

嬶が水引きや
蛙がワルツ
月も風情の　裏つくば

割の悪いを
云うではないが
停年なしの　稲作り。

（五九・六・一八作）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

燕

五月　葉の隙
　矢玉のように
飛んで風切る　　初つばめ

青い濡れ羽に
　首論が赤く
ませて　いなせな　里帰り

性がいじらし
　鴨居にまたも
可愛い奴だな　　巣を作る

つばめ通い路
　細目に障子
開けておいらは　　野に稼ぐ。

（五九・五・一五作）

田螺

田螺　のっそり
白い舌
　水濁らせて　　何漁る

シュール　シュールと
田が沸いて
　ゴロリ寝返る　　稲床に

堆肥が効いて
出来がよく
　田螺産み月　　稲あ穂どき

水が渇(かっ)れりや
泥を被(き)な
　畦の鴉が　　狙ってる。

（五九・五・二〇）

水鶏

夏の夕刻(じかん)
群青の
小田を叩いて　鳴く水鶏(くいな)

ほんに愛(よ)い奴
おらが田に
葉を折り畳み　青い巣を

かけた巣に雛
いつ孵る
老い目細めて、　水を引く

残照　谺
生きる啄(おと)
里に残して　日が沈む。

（六〇・五・二八作）

想いが稔る

穂になる茎が　　坪千本と
それを目標(めあて)に　　稲作り

祈る　想えで　　お百度参り
小暑来るまで　　穂をいのる

見込みないものぁ　非情も敢えて
淘汰　三つ日の　　土用干し

稲は群青　　走り穂白く
カンカン照りに　　田がうだる

カナカナ蟬が　　たり穂をうたう
去年(こぞ)の分まで　　照れ残暑。

（五九・七・一作）

野良たばこ

腰巾着の
　煙草入れ
　　忘れりゃ仕事に　なりやせぬ

煙草　恋火を
　掌でかこみ
　　点けて輪に吹く　野良休み

マッチが湿りゃ
　隣田へ
　　煙草貰え火　　長話し

一服　千両
　野良の味
　　叩きゃ火玉が　　掌に燃える。

（五九・七・八作）

青葉風呂

たまにゃ　仕事を
早仕舞い
　腰を伸ばして　　青葉風呂

窓の若葉が
湯に映えて
　浸りゃ湯ごころ　後生樂

遠田蛙の
鳴く聲に
　月も浮かんで　　乙なもの

温泉(いでゆ)がわりの
眉月に
　いのち養う　　浮世風呂。

（六〇・六・一〇作）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com